

第七十三回広島市短詩型文芸大会優秀作品集（簡易版）

第七十三回目となる「広島市短詩型文芸大会」が、本年十一月十一日に開催されました。多くの皆様にご応募いただき厚くお礼申し上げます。

この大会は、昭和二十六年（一九五一年）、戦後のまだ物質的に豊かでない時代に、市民の心の復興の一助にという願いから開始されて以来、市民文芸を愛する多くの方々に支えられ、毎年度開催してきました。成熟社会を迎えるとともに、高齢社会となり、新たな課題が顕著になった今日においても、多様な文化を振興し、市民が豊かで生き生きと暮らせるまちをつくるうえで、この大会の意義は大きいと考えており、今後も長く継続することを願っております。

今回は新型コロナウイルス感染症対策のため実施を割愛していた部門ごとの学習会を久しぶりに開催することができ、たくさんのご応募された方々にもご参加いただくことができました。また、二百五十五名の皆様に五百八十二の作品をご応募いただきました。はじめてご応募いただいた方から、長年ご応募いただいている方まで、また三十四歳から九十七歳の方まで、多くの皆様にご参加いただき、心から喜んでおります。

ここに、今回の大会で選ばれた優秀作品をご紹介します小冊子を発行いたしました。皆様の今後の活動にお役立ていただければ幸いです。

終わりに、第七十三回「広島市短詩型文芸大会」の開催にご尽力された関係者及びご応募いただきました皆様に重ねて深く感謝申し上げますとともに、この大会が、広島の人々を愛する皆様の創作活動の一助になりますことを祈念いたしまして、巻頭のごあいさつにさせていただきます。

令和五年十二月

（公財）広島市文化財団
中央公民館館長 砂原晴紀

第七十三回広島市短詩型文芸大会 選者紹介（敬称略）

【俳句の部】 木村 里風子

水口 佳子

工藤 義夫

鈴木 厚子

山口 美智

【詩の部】 北村 均

万亀 佳子

豊田 和司

【川柳の部】 森崎 八重子

高東 八千代

永井 有三

浅原 志ん洋

弘兼 秀子

山本 恵子

【短歌の部】 山本 光珠

岩本 幸久

俳句

△広島市長賞▽

氷柱折り出棺準備整ひぬ

小都 妙子

△広島市教育長賞▽

金魚玉透けて幼の大きな目

堀向 博子

△広島市中央公民館長賞▽

石の影雲の影置き大花野

大上 充子

△入選▽

はちぐわつや鶏舎跡地の鎮魂碑

永井 勝弘

消えずの火映し水澄む爆心地

斎藤 金二

天高し砂丘につづく大海原

鴻遊

稲架かけて棚田に日ざし集めたり

楯 幸子

河鹿笛生まれ在所に存へる

小西 佐和子

夕焼けの丘の古墳に錆びし絵図

荻野 りつ子

海へ向く戦艦の碑よ晩夏光

大久保 信子

雲の峰反骨心の衰へず

村本 クニ子

紫陽花の雫のなかに父がゐる

山根 可寿志

湯上がりの夫の軽さや秋思なほ

徳毛 佳美

病める子の寝息たしかに月の家

中田 りん

流木に著き鉋痕弥生尽く

上山本 一興

旅靴ふつくらとして新樹晴れ

煙石 博

己が羽根啞へ駆けをり羽抜鶏

新本 孝子

遠泳の飴もらひたる「ア」の口で

佐々木 南香

冬の海かもめが無垢になつてゆく

藤本 智恵子

△選者選▽

木村 里風子 選

夕焼けの丘の古墳に錆びし絵図
湯上がりの夫の軽さや秋思なほ
石の影雲の影置き大花野

荻野 りつ子
徳毛 佳美
大上 充子

水口 佳子 選

紫陽花の雫のなかに父がゐる
病める子の寢息たしかに月の家
冬の海かもめが無垢になつてゆく

山根 可寿志
中田 りん
藤本 智恵子

工藤義夫 選

はちぐわつや鶏舎跡地の鎮魂碑
金魚玉透けて幼の大きな目
氷柱折り出棺準備整ひぬ

永井 勝弘
堀向 博子
小都 妙子

鈴木厚子 選

氷柱折り出棺準備整ひぬ
天高し砂丘につづく大海原
己が羽根啗へ駆けをり羽抜鶏

小都 妙子
鴻遊
新本 孝子

山口美智 選

金魚玉透けて幼の大きな目
氷柱折り出棺準備整ひぬ
遠泳の飴もらひたる「ア」の口で

堀向 博子
小都 妙子
佐々木 南香

短歌

△広島市長賞▽

われを乗せ瀬戸大橋を駆る列車燃ゆる落暉^きをはね返しつつ

吉田 征子

△広島市教育長賞▽

原爆の死没者名簿の「鳥の子」に昨日が今日となる風に入る

大多和 義

△広島市中央公民館長賞▽

何処^{いずこ}かで君と会いたる日を思いコートを残す八十路の断捨離

中重 幸

△入選▽

銀メダルのやうな位置だね餌をやれば後ずさりする二番手の猫

森 ひなこ

定まらぬ石を蹴りつつ笑ひつつ子らは追ひぬく夕日の道を

永井 勝弘

臥す母の玻璃に幽き凍て星は母の朝になほ見られめや

甲野 裕之

いつまでの命と知らぬ晩年を陽をこぼす窓眩しみて見つ

三浦 千枝子

つつしむということ知らぬこの暑さ「何よ」とすこめば力がもどる

たてだじゅんこ

雨含む闇けし穂先は重たかろチガヤの群れの雨季のざわめき

加門 光子

駅留めと野菜を送りし父母のかげ黙々貨物列車の過ぎゆく

新井 邦子

しばしでも被爆。ピアノのやさしき音に癒^なされてほしい死者の魂

三原 豪之

滝の水岩にぶつかריいっぽんの柱となりて流れゆくなり

黒飛 了子

島と島の間より霧立ち上り夕空ゆつくり青へと変わる^{あわい}

大越 由美子

△選者選▽

山本光珠選

われを乗せ瀬戸大橋を駆る列車燃ゆる落暉きをはね返しつつ

吉田 征子

何处いずこかで君と会いたる日を思いコートを残す八十路の断捨離

中重 幸

定まらぬ石を蹴りつつ笑ひつつ子らは追ひぬく夕日の道を

永井 勝弘

いつまでの命と知らぬ晩年を陽をこぼす窓眩しみて見つ

三浦 千枝子

駅留めと野菜を送りし父母のかげ黙々貨物列車の過ぎゆく

新井 邦子

滝の水岩にぶつかりいっぱんの柱となりて流れゆくなり

黒飛 了子

島と島の間より霧立ち上り天空ゆっくり青へと変わるあわい

大越 由美子

岩本幸久選

原爆の死没者名簿の「鳥の子」に昨日が今日となる風に入る

大多和 義

銀メダルのやうな位置だね餌をやれば後ずさりする二番手の猫

森 ひなこ

臥す母の玻璃に幽き凍て星は母の朝になほ見られめや

甲野 裕之

つつしむということ知らぬこの暑さ「何よ」とすこめば力がもどる

たてだじゅんこ

雨含む闌けし穂先は重たかろチガヤの群れの雨季のざわめき

加門 光子

われを乗せ瀬戸大橋を駆る列車燃ゆる落暉きをはね返しつつ

吉田 征子

しばしでも被爆ピアノのやさしき音ねに癒されてほしい死者の魂

三原 豪之

詩

△広島市長賞▽

夏豆

嶋末 初美

早春に

モンシロチョウのような そら豆の花は
天を向いて咲く
さやが生まれ
やがて熟すと
ぺこりとおじぎする

初夏の便りが 今年も届いた
人生の大半を
仕事に 子育てに 介護にと
そして やっと 肩の荷をおろし
老いと向き合い 自然と向き合う日を
送る
人からの 便りだ

ぷつくりと 太った豆は

その人の 生の証

その証を いただく私は 老いる自分を
御しきれずにいる

箱から取り出した豆の鞘を 指で割く
白い綿毛にくるまれた豆は

初々しい 緑色

たつぷりの 水で湯がきざるにとる

「わー そら豆」と 孫娘の声

「好きか」と聞くと

こくりと うなづく

なんだか うれしくなってきた

よーし

緑の滋養を いただいて

私の 下がりがけた頭を

「よいしょ」と持ち上げてみよう

五月の終わり

心地よい風が 吹きぬけていく

△広島市教育長賞▽

かいひん
海浜の花火

宮崎 華瑠夫

へきかい こくとうとう

碧海へ黒洞洞たる夜が流し込まれ

えんじ

残照の臙脂が溶触されてゆく

うばたま

烏羽玉の闇夜の夢に向かつて

光の華よ 狂い咲け

この空が光の遊び場だ

われら、人 この邪気を

どうせ吐き出すなら美しく

光の砂を空にまこう

たばしる光は麗しく

なないろ

七色の光のページをめくる

この闇夜を光でこじ開けて

くまで

光の熊手で引っ掻きまわす

光のミジンコ 光のパンチパーマ

そてつ

光の雌しべ雄しべ 光の蘇鉄

ぞうり

光のブロッコリー 光の草履

おり

光の釘 光の斧 光の檻……

重力に逆らい攀じ登り

重力に導かれて光が垂れる
重力が光を帯びて
重力が明滅する

光の棒が夜空を突き破り
たいりん大輪の光が夜の平衡を掻き壊す
夜の海に光の遮断機が下り
お旋回した光は冥暗に消えなづむ
めいあん

音が世界にこだまして
かくはん夜空に攪拌する爆爆爆

光の音が飛び回り

爆風が私の鼓動を突き上げる

しょういだん焼夷弾のような音を立てて
空に突撃し 噛みつき 散る

生成と消滅

人類の業火のごとき火の束よ
ごうか

人が人を殺めるように

光が闇を切り刻む

人が土地を奪うように

闇が闇を奪い返す

真夏の夜空に光の翼を広げ

光の羽が地に散り敷く

あの光の鳥は

一体どこへ向かうのか……

△広島市中央公民館長賞▽
覚悟

増田 淑子

入道雲がため息ついて
ひつじ雲に変わるころ
フランスからの便りが届く
白いエッフェル塔のキーホルダー揺れる
私たちは 今日も生きてる
空でつながる 遠く大地へ

大地に立つ人

今年の夏雲は キッパリと
キッパリとしていた
覚悟を決めよ！と そびえていた

入道雲がため息ついて
ひつじ雲に変わるころ

覚悟を決めようと 覚悟を決めた

子供の時の絵日記は

麦わら帽子 車窓から

飛んで行った 夏休み

入道雲がため息ついて
ひつじ雲に変わるころ

こずえ梢がざわめく

深呼吸をする

川柳

△広島市長賞▽

もう戦止めませんかと月が出る

常國 喜好

△広島市教育長賞▽

破滅へのシナリオ核を遊ぶ

豊田 芳香

△広島市中央公民館長賞▽

想い出を捲ると少年に戻る

鴨田 昭紀

△入選▽

シナリオは神に委ねて生き抜かん

小松 好子

日本の宝が集う広辞苑

常國 喜好

もう一度やり直したい父母介護

山本 一

効く言葉探しに脳を旅に出す

吉村 充

移植した臓器とともに明日の生

豊田 芳香

老いの足世の移ろいに急かされる

大杉 卓雄

方言で故人を偲ぶ通夜の席

野坂 辰夫

少年は答を探す旅に出る

豊田 芳香

ひとり来て残した妻を想う旅
としつき

常國 喜好

年月が教えてくれた許すこと

池田 久美子

積み残すことのみ多し朝の月

高本 澄江

面影に色付けしつつ母想う

日下 洋子

無党派の流れ次第で山動く

奥村 吉風

シナリオを父母に返して独り立ち

森田 博之

同期会世話好きがいて半世紀

土居 直子

兼題 「旅」

森崎 八重子 選

特選 効く言葉探しに脳を旅に出す

吉村 充

特選 少年は答を探す旅に出る

豊田 芳香

特選 ひとり来て残した妻を想う旅

常國 喜好

佳作 かわいい子旅をさせたら帰らない

鬼塚 幸雄

佳作 日常を忘れる旅の異空間

羽城 裕子

佳作 あの夜に脱いでしまった旅ごころも

山下 天平

佳作 病床で空約束の船の旅

別木 英正

佳作 古い元氣デイズニerland子にかえる

持永 光子

兼題 「月」

高東 八千代 選

特選 もう戦止めませんかと月が出る

常國 喜好

特選 年月が教えてくれた許すこと
としつき

池田 久美子

特選 積み残すことのみ多し朝の月

高本 澄江

佳作 敬慕した父の月日がある書棚

鴨田 昭紀

佳作 母さんと呼ばれた様な赤い月

安部 敦子

佳作 月光を浴びて邪心を削ぎ落す

俵 逸子

佳作 猛暑日の続く貴方の生れ月

田中美代子

佳作 満月をローカル線が待っている

小西 博子

兼題 「想う」

永井 有三 選

特選 もう一度やり直したい父母介護

山本 一

特選 面影に色付けしつつ母想う

日下 洋子

特選 想い出を捲ると少年に戻る

鴨田 昭紀

佳作 想い出の真中にある母の顔

俵 逸子

佳作 胸の奥想い出しつつ又しまう

佐多 咲子

佳作 どうしようるか？まだ耳に有る兄の声

別木 英正

佳作 本当の想いは紙の裏に書き

原 憲子

佳作 想いは雑多スクランブルの交差点

豊田 佳子

兼題 「移る」

浅原志ん洋選

特選 移植した臓器とともに明日の生

豊田 芳香

特選 老いの足世の移ろいに急かされる

大杉 卓雄

特選 無党派の流れ次第で山動く

奥村 吉風

佳作 小走りで追いかけている余命表

荒新 悠子

佳作 地球沸き四季から二季へ様変り

日下 洋子

佳作 四季の国移る季節が狂いだす

持永 光子

佳作 飛ばされた過疎地で人の情け知る

別木 英正

佳作 情が移れば鬼も手加減してくれる

豊田 佳子

兼題 「シナリオ」

弘兼秀子選

特選 破滅へのシナリオ核を遊ぶ

豊田 芳香

特選 シナリオは神に委ねて生き抜かん

小松 好子

特選 シナリオを父母に返して独り立ち

森田 博之

佳作 最悪のシナリオ常に持ち歩く

矢島 敏秀

佳作 有り触れた僕のシナリオ泳ぎ切る

坪井 環

佳作 人生は悲喜のシナリオふんだんに

井藤 淳三

佳作 風任せシナリオのない介護劇

住田 照水

佳作 シナリオが狂ったおかげ夫婦箸

山下 天平

兼題 「集う」

山本恵子選

特選 日本の宝が集う広辞苑

常國 喜好

特選 方言で故人を偲ぶ通夜の席

野坂 辰夫

特選 同期会世話好きがいて半世紀

土居 直子

佳作 ひと声で酒好き集う古希の宴

熊川 勝彦

佳作 子や孫が集い古屋がはしゃぎ出す

豊田 佳子

佳作 被災地に見知った顔のボランティア

穴戸 三喜恵

佳作 披講の席どっと歓声大きな輪

若山 宗彦

佳作 土曜日は子らが集う日栗の飯

田中 美代子